

フレibel『母の歌と愛撫の歌』

○ブリュンナー編 莊司雅子訳

○キリスト教保育連盟発行

キリスト教保育連盟が、連盟の創立九十年と、日本の幼稚園創設百年の記念出版として、フレibelの「母の歌と愛撫の歌」を刊行されたことは、実に意義深いことであると思う。この書物の日本語訳は、昭和九年に茅野蕭々氏が訳されて、岩波書店から出版されたものがあり、私は三十年も前から、欲しかったのに手に入らなかった。このたび、莊司雅子氏の新訳により、装丁も、図版も、原著のままに刊行されることをきいたとき、夢の中のできごとのような気がした。フレibelの詩とウンゲルの銅版画

より成るこの書物を、自分のものとして手にとることができるということは、実に、並々ならぬことである。

周知のように、フレibelの著作には、一八二六年に出版された「人の教育」(Menschenziehung 小原国芳訳 玉川大学出版局)があり、それによって彼の教育哲学を知ることができる。また、「恩物」は、フレibelの教具として、日本でも、明治の初めからよく知られていた。フレibelのもうひとつの大きな功績は、この「母の歌と愛撫の歌」である。「家庭のための本」と副題がつけられて、母性教育のためのものでもあるが、詩と銅版画より成るので、時代を超えて、見る人の誰をも魅きつけずにおられないものである。原著は一八四四年に出版され、フレibel晩年の著作であ

る。表紙には、両腕に女の子と男の子を胸に抱きかかえた母親の像と、男性としての力と威厳をもってその子らを導く父親の像が描かれ、扉には「Mutter-Spiel und Koselieder 母の遊戯と愛撫の歌」の題名を配して、家族の団欒から、少年少女へと育ちゆく姿が、天に伸びる樹木になぞらえて描かれている。そこには、フレibelがああ自伝の中で、象徴的に述べている、垣根の向う側に咲いているのを憧憬をもって眺めていた、ああ百合の花も描かれている。その百合の花は、フレibelにとって、幼児教育そのものではなかったかと私は想像している。

今回の新版の訳者である莊司雅子氏は、フレibel研究者として日本の幼児教育界に大きな功績のある方であるが、この新版の終りに付けられた「本書の読

者へ」という文章の中で、「私のフレイベル研究の情熱を最初に燃やしたのは、実に茅野蕭々訳のこの『母の歌と愛撫の歌』でありました」と述べておられる。

先生の幼児教育研究者としての生涯の出发点に、この書物に対する感動の日々があったことを知り、感銘を新たにさせられた。フレイベルの華生の著作は、ここに最もふさわしい訳者を得られたのであると思う。キリスト教保育連盟が五年前からこの記念出版の計画をなされ、G・E・キュックリッヒ、三好浪江、佐藤初重の三氏によって、この記念事業が推進されたとのことである。いま、この記念出版の刊行を見て、心からお祝いする次第である。

この書物に私が初めて接したのは、終戦直後、私が学生だったときの、岡部弥

太郎先生の幼児教育演習だった。僅か数人の学生がテーブルを囲んで、薄暗い図書館の演習室で行なわれたその当時は、決して面白いとは言えない授業だった。

しかし、先生の立派な口髯と共に、不思議といくつか忘れ難い記憶がある。祖国を失って、なお幼児教育に祖国復興の希望を託したコメニウスのこと、英国のマクミラン姉妹のこと、それから茅野蕭々氏訳のフレイベル「母の歌と愛撫の歌」

を、ある日、持ってきて見せて頂いたことは、鮮明な記憶のひとつである。いまだ幼い頃、純粋に教育精神を論ずることができた時代であった。茅野蕭々氏訳のこの書物と一緒に、岡部先生から見せて頂いたのは、明治三十年にA・L・ハウ女史が、坂田幸三郎氏の協力により出版された日本訳である。これは周

知のように、ウンゲルの銅版画が、画も共に日本の風俗に翻訳された珍しいもので、世界中に、このような訳書は、他にないのでなかろうか。以来私は、保育史のことを話すときには、「母の歌と愛撫の歌」のこの二種類の書物を見せることを常としてきた。この書物を紹介させて頂くにあたり、私自身とのかかわりを述べさせて頂いた。

幼児教育を専攻しようとする方々が、このプルーファー編のフレイベルの原著の体裁のままの「母の歌と愛撫の歌」を、自分のものとして秘蔵しておかれることを、おすすめする。(発行所 キリスト教保育連盟、〒101 東京都新宿区中落合二ノ四ノ二、電・九五三一五一三六 定価一〇、〇〇〇円) (津守 真)